

「ボランティアセンター設立 10 周年を迎えて」(総長挨拶採録)

立教大学総長 吉岡 知哉

本日お集まりくださった皆様、そして、これまでボランティアセンターを支えてきてくださった方々と、活動に参加してくれた学生諸君、本日おみえになっていない方も含めまして、日ごろの地道なご支援とご協力に感謝を申し上げます。

ボランティアセンターは今年設立 10 周年を迎えたわけですが、立教大学には長いボランティアの歴史があります。考えてみますと、立教大学が創立されたのは 1874 年のことですが、ウィリアムズ主教が来日して宣教活動をされる中で、築地で立教の前身となる私塾を始められました。もちろんウィリアムズ主教にとっては、私塾の開設は宣教活動の一環だったかもしれませんが、教会を建て布教をしていくことと、学校をつくるということは、やはり違いがあるような気がします。その意味では、そもそも立教大学自体、ある種のボランティア精神によってできたのではないかという気がいたします。

なぜこのように思い至ったか。私たちは、人間の活動を、ある種の合理的な行動としてとらえることに慣れてはいないでしょうか。この場合の合理性というのは、一言で言ってしまうと「計算可能性」です。さらに分かりやすく言えば、「交換のモデル」ですね。つまり、自分が何か行動すれば、それに見合った対価として何か返ってくるというのが人間の合理的な行動のイメージかと思いま

す。そして、「交換のモデル」の集積が「市場のモデル」なのです。私はヨーロッパの近代政治思想史を専門としておりまして、基本的には、契約とか取引といった「交換のモデル」が研究の中核的な部分なのですけれども、私自身は昔から、この考え方に何となく違和感を持っていました。人間の活動というのは、本質的にそのように割り切れるものではないのではないかと、本来

は対価とは異なるものによって動いているのではないかという感覚をずっと持っていました。

東日本大震災後に迎えた初めての夏、立教大学は陸前高田に学生有志によるボランティアを送りました。まだ多数残っているがれきを撤去するといった、純粋な肉体労働が必要な段階でした。その第 1 次隊派遣の前にチャペルで結団式をした際、私は短い挨拶をし、このように申し上げました。これから皆さんはボランティアに行き、そこで非常に多くのものを得るだろう。しかし、皆さんは多くのものを得るために行くのではないのだ。あなたたちは、相手を助けて手伝いに行く。そういう意味では、本当にただの力として働くべきなのではないか。一方的に言われたことをただひたすらにしてくるべきではないかと。そして、そのような活動をする中で何かを得ることになるだろう、ということもつけ加えたような気がします。しかし、本当はそうではなくて、いつか何か返ってくるとか来ないとかということとは関係なしに、人のために対価を求めないで活動すること、それ自体が喜びなのではないかと今にして思います。

交換のモデルというのは、時間とは無縁です。渡した瞬間に 1 対 1 の対価が返ってきて、同時の交換で終わりになる。時間のずれがない仕組みです。ボランティアは違います。人間の行動の基礎にある、例えば奉仕であるとか、みずからある意味で一方的に何かを差し出したり、何かをしたりする行動は、時間と空間に大きなずれがあるのです。

つまり、何かをしたときに、直接それに対してではなく、いつか分からない、どこからも分からないけれども、何か返ってくる。それもやはり誰かからの贈り物であったり、あるいは自分の中から生じるものかもしれない。見返りを求めない

行動、互いを思いやる心がみずからを幸せにしていく。このずれというものが、人間を人間たらしめているのではないかという気がしています。

そう考えれば、友達との関係、家族も、子どもを育てることも、みんな同じ仕組みではないかと思うわけです。さらにつけ加えると、教育も同様です。

学問は、単に学ぶことに対する対価として知識を与えたり受け取ったりするものではない。どこかで無償な、別の言い方をすると無駄があり、それが大事だという気がしてなりません。これは、

ウィリアムズ主教が学校をつくった意図の基礎にもあると思うのです。

立教大学のボランティアセンターは、決して大きな組織ではありません。しかし、その活動は、立教大学の中の光の源のようなものではないかと思っています。皆様に支えられた10年をお祝いするとともに、これからも地道に歩み続けてまいります。この集まりが本当に実り豊かな会になることを確信しております。

本日はお集まりくださいまして、誠にありがとうございます。

